

木の葉色濃き山路かな

辻 憲男（文学部教授）

兵庫区の平野（ひらの）から鈴蘭台の東をぬける道を有馬街道という。昭和3年に電車が開通するまでは、有馬へはこの山道をたどって行った。

文豪・幸田露伴は明治23年（1890）5月にやって来た。前年に東京～神戸間に鉄道が通じたばかりだった。『まき筆日記』によると、東海道線の住吉駅で降りてカゴに乗って六甲山を越えた。赤肌のハゲ山に小松がはえていた。有馬は狭い共同浴場が一つあるだけで、宿に内湯はなかった。温泉寺の宿坊だったなごりで、みな何々坊といった。湯治客は湯女（ゆな）にユカタを持たせて入浴に行く。男女も病人も混浴である。まだ若かった露伴は、湯につかるのもそこそこにあがった。6日ほど退屈して過ごした。人力車で神戸に出て、名物の“大塊の牛肉”を食べ、船で四国こんぴらに向かった、云々。名所図会によると、湯槽の大きさは約4×6メートル四方、底は敷き石だったという。

1491年10月、連歌師宗祇（そうぎ）と肖柏、宗長は、有馬で「湯山三吟」百句を作った。「うす雪に木の葉色濃き山路かな」「岩もとすすき冬やなほ見ん」「松虫に誘はれそめし宿出でて」「小夜ふけけりな袖の秋風」というふうに、三人で五七五と七七を交互につらねる文芸である。

天下の名湯も1995年の大震災では大きな被害を受けた。埋もれていた太閤の湯殿が発見されたりもした。有馬を愛した豊臣秀吉は、1596年の慶長大地震で壊れた浴場を復興し、自分用の浴室を作らせたのである＝写真。そういう新名所や施設が増えて、温泉の楽しみかたも変わった。

